

2025年度 第5号

(通算第31号)

今回の発行人 築瀬千詠

yanase@shohoku.ac.jp

湘北 SDGs

Think Globally, Act Locally.

学校法人ソニー学園 湘北短期大学

生活プロデュース学科・リベラルアーツセンター

〒243-8501 厚木市温水 428 TEL:046-247-3131 FAX:046-247-3667



湘北短期大学の SDGs について
ご紹介するニュースレターです

～発行者からのお知らせ～

23年度から、Webサイト湘北SDGsを開設し、授業や大学全体の取り組みを紹介しています。

ニュースレターでは、Webサイトに掲載した記事の中から、学科の授業や部門ごとの活動を、カテゴリー別にまとめて紹介していきます。

今後とも湘北短期大学は地域に根ざした教育機関として「Think Globally, Act Locally」を合言葉に、社会課題の解決にむけて持続可能な未来の創り手を社会に送り出していきたいと思います。



Demopolly公式サイトへのリンク

【授業紹介】ゲームで学ぶ民主主義

カードゲーム「Demopolly」で主権者意識を育む

(2025年7月)

楽しみながら「民主主義」を考える

2025年7月3日、「現代女性の社会学」(生活プロデュース学科2年生選択科目)の授業にて、民主主義の本質を体験的に学べるカードゲーム「Demopolly(デモポリー)」(すなばコーポレーション)を実施しました。「Demopolly」は、参加者一人ひとりが架空の世界「アニマルタウン」で暮らすさまざまな年齢や職業の市民(動物)となり、イベントや対話、投票を通じて意思決定を行うシミュレーションゲームです。

自分一人の利益だけでなく、「社会全体をどう良くするか」という視点が試されます。

主権者として生きる「シチズンシップ教育」

2016年に選挙権が18歳に引き下げられてから10年が経ちました。若者が社会の形成者として主体的に関わる「主権者教育(シチズンシップ教育)」の重要性がますます高まっています。学生たちは、選挙結果によって生活水準や税負担が劇的に変わる様子を目の当たりにし、「一票の重み」を身をもって実感しました。特定の世代に有利な政策が他の世代にどのような影響を及ぼすのか、ゲームを通してグループ内でも対話が活発に行われ、まさに「生きた民主主義」を学ぶ場となりました。



学生のふりかえりをいくつか紹介します。

■「声」を届ける権利と責任、「たかが一票」が「大切な一票」へ
「今まで選挙に行っても、自分の票では何も変わらないと思っていました。自分の投票により政党が決まり、世の中が大きく変わるのを目の当たりにして驚きました。文句を言うだけでなく、選ぶ権利があるからこそ、しっかり考えて投票したいです」

■政治を「自分たちの問題」として捉える

「若者応援党が当選した際、子育て世代の生活が豊かになる一方で、高齢者が困窮していく現実を見て恐ろしさを感じました。誰かが得をすれば誰かが損をするかもしれない。そんな社会の仕組みの中で、いかに良いバランスを見つけるかが政治の役割だと実感しました」

本学では、複雑な社会課題を自分たちの問題として捉え、対話を通じて解決策を探る「実践的なシチズンシップ教育」を推進しています。これからも、学生たちが一人の主権者として自信を持って社会に参画できるような、体験型の学びの場を提供してまいります。

(生活プロデュース学科 築瀬千詠)

【授業紹介／学外活動】JICA 地球ひろば訪問:多文化共生と「知らない私に会う」旅 (2025年7月16日)

世界の課題を「自分ごと」として捉える

2025年7月16日、ゼミナールI(生活プロデュース学科必修科目)の授業の学外活動として、築瀬ゼミの学生5名が、東京・市ヶ谷にあるJICA(国際協力機構)の展示・体験施設「JICA 地球ひろば」を訪問しました。今回の訪問の目玉は、多文化共生社会企画展「If I Were You / If You Were Me — 知らない私に会う」の見学です。この展示では、育った場所や言葉、価値観が異なる一人ひとりをつなぐ一つの「世界」と捉え、他者と出会うことで自分の世界が生まれ変わる体験を提案しています。

体験型展示で学ぶ SDGs

学生たちは、開発途上国での活動経験を持つ「地球案内人」の解説を聞きながら、世界の現状やSDGsに関する展示を熱心に体験しました。単に知識を得るだけでなく、「もし自分が相手の立場だったら」という視点で考え、迷い、答えを探すプロセスを通じて、多文化共生社会における「正解のない問い」に向き合う貴重な時間となりました。

訪問翌週には、各自現地で学んだこと、印象に残ったことを調べスライドにまとめて全員が発表しました。その内容の一部を紹介します。

■「自分ごと」として捉える国際協力

「JICA 地球ひろばは、世界が抱える問題を体験型で学べる場所でした。ラオス語のスタンプ体験などを通じ、遠い国の出来事だと思っていたことが、実は私たちの生活と深くつながっていることを発見しました。楽しく学ぶ中で価値観が広がり、国際協力やボランティアへの興味がぐっと深まりました」(R.T)

■ 伝統アイテムに込められた願い

「モロッコの植物由来の口紅や、ボリビアの願いを託すエケコ人形、モンゴルの骨占いなど、世界の伝統的な道具に触れました。それぞれのアイテムには、その国の人々の願いや生活の知恵が込められています。日本とは異なる文化の違いを面白く感じるとともに、もっと世界を知りたいという意欲が湧きました」(H.H)



JICA 元理事長 緒方貞子さんの等身大パネル前で

■ 体験から気づくユニバーサルデザイン

「左手用の急須やレードルを使う展示を通じ、右利き中心の社会にある不便さを身をもって体験しました。また、JICA 元理事長の緒方貞子さんの力強い歩みにも感銘を受けました。ピクトグラム制作などの動く・触る展示を通じ、誰もが暮らしやすい多文化共生社会について考える貴重な機会となりました」(R.K)

本学では、教室での学びにとどまらず、学外での体験を通して世界の課題を「自分ごと」として捉える感性を養っています。これからも多様な価値観に触れる機会を大切にし、社会で本当に役立つ人材の育成をはかっていきます。

(生活プロデュース学科 築瀬千詠)